[dõ:k]

DONC どんく

発 行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418
418, Komei-cho Tsu-shi
TEL. 059-226-2766
FAX. 059-229-0967

N° 52 avril 2000 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

今年もリヨン大学から企業研修生
C.CARAさんとA.RUFFIERさん

本会理事・豊田さんのコーディネートにより、ここ数年リヨン大学から四日市方面の企業への研修生受入れが続いていますが、今年も二人の女子学生が４月から四日市近鉄百貨店で研修を受けています。シンティア・カラ Cynthia CARA さんと、アレクサンドラ・リュフィエ Alexadra Ruffier さん。二人はリヨン第２大学修士課程で経済学を学んでおり、日本の経済を体験的に学ぶため今年１月来日、東京の専修大学で日本語の特訓を受けたあと３月に四日市入りしました。

シンティアさんとアレクサンドラさん

シンティアさんはロレーヌ地方メッツ市出身で、以前にも１年間日本に留学した経験がある日本びいき、登山が趣味で歌舞伎も大好きとのこと。またアレクサンドラさんはアルプスに近いエウィアン市の出身、ダンス（モダンバレー）はプロに近い腕前のようです。

将来は二人とも貿易関係の仕事に(できれば日本で）つきたいとのこと、四日市市でホームステイの生活をしながら先ずはデパートの売場での研修についております。

日本語の習得が一つの目的であって多くの日本人との接触を希望しており、余暇に個人的なフランス語のレッスンもＯＫということ。ご希望があれば四日市・豊田さん（0593-51-8031）まで。

また一般を対象に二人を講師としたフランス語講座が５月中旬から実施されます。

事務局よりお願い 会の活動のありかたなどについて皆様のご意見をうかがい今後の運営に資するため、今回初めてアンケートを実施することとなり、その用紙と返信用封筒を同封しました。どうか忌憚のないご意見をお寄せください。またこの際、新しい会員名簿を作りますので、ご住所その他変更がありましたらついでにお知らせください。

会員の随想

アルヴェールのソネは謎に満ちて

井 土 真 杉

Ma vie a son secret, mon âme a son mystère,
Un amour éternel en un moment conçu.
Le mal est sans espoir; aussi j'ai dû le taire
Et celle qui l'a fait n'en a jamais rien su.

いまひとつ理解しにくいこの詩句は、アルヴェールという19世紀前半のフランス詩人による有名なソネ（十四行詩）の最初の４行である。

学生時代ＮＨＫラジオ講座の付属レコード（10インチ盤ＳＰ）でこの朗読を聞き、なんとも音律が美しいのにあこがれてとりこになった私は、意味もわからぬまま繰り返し唱和しているうちすっかり覚えてしまった。発音の可否は別として、なんとか空んじられる詩はこの一編のみである。45年経ったのに不思議と忘れない。いまは５分前に調べた単語も忘れてしまうというのに。ちょうど小学生のときに覚えこんだ百人一首を生涯忘れないのと同じであろう。とかくリズムのいい文句は覚えやすい。

ところでヴェルレーヌやランボーなら訳詩もたくさんあって日本でもおなじみだが、こんなすてきな詩を作ったわりにはほとんど知られていないアルヴェールってどんな人だろうと私は大いに興味をもち、そのころ手に入れた「新ラルース絵入り小事典」（1952年版）の固有名詞の部分をさがしてみた。するとあるにはあったのだが…

Arvers (Alexis-Felix), poète français,né à Paris (1806-1850), immortalisé par un Sonnet commençant par ce vers:
Mon âme a son secret, ma vie a son mystère.

要はパリ生まれの詩人で、例の一編のソネによって不滅の名を残したと書いてあるのだ。なんのことはない、『坊ちゃん』を読み漱石に興味をおぼえて辞典で調べたら、小説家・『坊ちゃん』は有名、などと載っているようなものでがっかりだ。あるいはひょっとすると『異邦人』だけが大ヒットしたあの久保田早紀（カミュではない）のような「一発屋」なのか？バルザック（1799-1850）と同じ年に死んだ人だということが分かったのが収穫ではあった。

その後私は折りあれば日本語の仏文学史の本や訳詩集などをあさってみたが、アルヴェールさんについての説明はおろか、「不滅の」このソネさえも見つかったためしがない。最近、県立図書館で91年版のラルースを見つけて引いてみたら、ほぼ同じ説明で、ただ「不滅」の代わりに「このソネで名声が保たれている」と表現していた。さらにわが愛用の小学館・ロベール仏和大辞典（88年版）でも大同小異の記載だが（ラルースを参考文献としているからか）、詩の一行目にこんな訳をつけてくれている：「我が魂はひそやかに、我が生は謎に満つ…」。

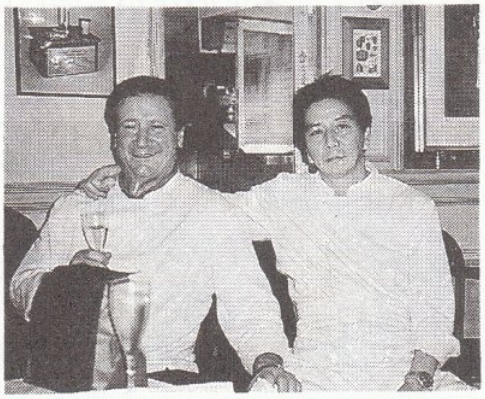
さて、アルヴェール「研究」は諦めるとして、どうしてもフに落ないのが一行目。かつてのレコードも、したがって私のマル暗記も、〈Ma vie〉「我が生」が先で〈mon âme〉「我が魂」はあとなのに、上記の諸辞典では逆になっているのだ。はたしてどっちが正しいのか。私は意味からではなく音の調子から〈Ma vie a son secret,…〉説に確信をもつのだが。

まさに「謎に満つ」るこの詩について何か情報をおもちの方がおられたら教えていただきたい。またこのソネの全文を知りたい方にはお教えしましょう。ただし当時のメモによるものだが。

フランスに生きる三重県人（Ⅰ）

パリのレストラン「カーヴ・ドゥルオ」の料理長

中村 恭さん 海山町出身



仕事のあとパトロンと一息入れる中村さん(右)

旧オペラの後側のオスマン大通りを東へ5，6分ほど歩くと右側がドゥルオ通り、曲がって4軒目あたりに「カーヴ・ドゥルオ」はある。間口は狭いが意外に奥が深く、店内はいかにも「古きよきパリ」を思わせる華やかな造りで、昼食時などたいへんな繁盛ぶりである。この界隈、昔からの繁華街だがすぐ近所に「競売場」〈Hôtel des Ventes〉があるため関連の商店やオフィスも多く、そこでビジネスに携わる人たちのために、特に昼食（フランスのそれは質・量・時間とも我々の常識を超える）に力を入れたこんないいレストランができたのだろう。ちょうど兜町や北浜においしい食べ物屋があるように。そしてその舌の肥えた常連客たちを納得させる人気シェフがなんと三重県海山町出身の中村恭さんである。

中村さんは尾鷲高校卒業後まもなくフランス料理の道に入り、大阪のホテルやレストランで7年間修業、どうしても本場でということで単身渡仏、まずパリの「ミシェル・ロスタン」に4年半、その後「ヴィヴァロワ」などの名店で腕を磨く。そして現在の「カーヴ」へ。いまは毎日百数十人分の昼食を仕切る料理長だが、研究熱心な彼は本業があけたあと「ロビュション」「アピシウス」「アルページュ」などの超一流店にもスタージュ（実地研修）に出かけているという。

パリで知り合って結婚した由美子夫人、長男の章吾君(15)、長女彩那ちゃん(9)の4人家族で「よく食べ、よく飲み、よくしゃべる」明るい家庭生活だが、お子さん二人は現地校で学んでいるのでフランス語が母国語のようなもの、ご夫婦の語学教師はお子さんたちとのことである。パリでの生活20余年、ここの魅力は他人様に迷惑をかけない限り自分のペースを守れることだという。そして将来の目標は、小さくても自分の店を持つこと。会員各位、パリに旅行されたらぜひお立ち寄りを。

〈La Cave Drouot〉 8 rue Drouot, 9 e. tel. 01-47-70-83-38

Ⓜリシュリュー・ドゥルオ

今後もこのシリーズを続けますので、知人にフランス在住の三重県人がおられ

1/22 バルザックのお話・アンコール

昨年の総会で記念講演された大阪大学・柏木隆雄教授にお願いして再度バルザックについてのお話を聞く会が津市で実現し、十数人が参加しました。今回はバルザックの代表作のひとつ『ウージェニー・グランデ』について、柏木先生が執筆中の最近のご研究内容を未発表の段階で聞かせていただくということになりました。お話のタイトルは〈『ウージェニー・グランデ』における光〉。この作品全体を通して、たとえばあらゆる場面での道具だて、地名、人名にいたるまで、光と暗さ、その延長としての暖かさと冷たさ、というモチーフを見出すことができる、というたいへん興味深い見解を豊富な引用によって説明され、会場から活発な質問も出されました。柏木先生は松阪市のご出身ということもあってご多忙のなか本会には特に好意を示され、「こんな話でよければまたいつでも呼んでください」と再来を約束されました。

3/1(水)～6/4(日) プロヴァンス油彩画展 大阪・ふれあい港館

一昨年の三重県立美術館での「太陽の地プロヴァンス日本展」に作品とともに来県、昨年秋の本会メンバー訪仏の際は南フランスで受入れに活躍してくれたマルセイユの画家アルランディス（本名アントワーヌ・リカール）氏の新作個展が大阪南港のふれあい港館・ワイン・ミュージアムのギャルリー・カルフールで開催されています（入場無料）。同ミュージアムの開館５周年記念事業の一環として企画されたもので、ほかにも６月３日(土)木村尚三郎氏の講演とワインパーティー（会費4000円）など各種のイベントが予定されています。　**ふれあい港館 06-6613-2411**

個展会場でアルランディス夫妻とナウム仏総領事（中央）

サンテグジュペリ生誕百年　世界各地で記念イベント

『星の王子さま』『夜間飛行』などの作品や50フラン紙幣の肖像でも知られるフランスの「空飛ぶ小説家」、アントワヌ・ド・サンテグジュペリ(Antoine de Saint-Exupéry 1900－1944）の生誕百年を迎える今年、その人柄、業績などをしのぶさまざまな事業（展覧会、講演、記念飛行、除幕式など）がフランス各地はもちろん、アメリカ、モロッコ、スイス、ブラジルはか世界各国で開催されることになっており、その広報のための資料がフランス大使館文化部から送られてきました。ごく一部を紹介しますと、フランスでは5月23日からパリのパンテオンで〈Célébration d'un mythe〉のタイトルで展覧会が開かれ、また6月には3フランの記念切手が発売されます。日本関係では7月中、箱根のサンテグジュペリ・ミュージアムで『星の王子さま』原画展、ＴＢＳ系ＴＶでミュージカル『星の王子さま』が放映されるほか、11月以後、劇団「風」が同名の演劇を全国公演するとのことです。

フランス語読書会　5月から2冊目のテキストに

会員有志によって毎月第一木曜日の夜開かれているフランス語の本を読む会は、約半年かかって１冊目のバルザック『ファチーノ・カーネ』を完了し、5月からは同じバルザックの有名な短編『知られざる傑作』〈Le Chef-d'oeuvre inconnu〉に挑戦することになりました。これまでは8人ほどでゆっくりとしたペースでやっておりますので、この機会にぜひ新しい方の参加を希望しています。

訃　報

本会元理事で、尼子マリリン現理事の夫君・尼子哲男さん（大阪大学大学院経済学研究科教授・国際経営）は3月29日、肝臓障害のため死去されました。享年48歳。

謹んでご冥福をお祈りします。